

学びにおけるプロセスの意識化を促す日々のはたらきかけ

高学年児童の自己効力感と自律的学習に焦点を当てて

M14EP007

小林 恵子

1. 問題

本論文は高学年における自己効力感の獲得・向上と自律的学習の促進に焦点を当て、学びのプロセスの意識化を促す日々のはたらきかけについて検討するものである。筆者は昨年度、低学年児童を対象とし、「自分で出来そう」「ここまで出来た」といった自己効力感が得られるようなはたらきかけを行った。授業を中心とした学校生活全般の中で、意識せずに行われていると思われる知識の活用に焦点を絞り気づきを促した。普段の授業では見過ごされてしまいそうな児童の思考過程に教師がはたらきかけをしたことで、低学年でも活用を意識化できることが見出され、児童に自己効力感が得られることが明らかになった。

平成19年に学校教育法が改正され、学力の重要な3つの要素の一つとして「主体的に取り組む態度」が示された。また、平成20年の学習指導要領の改訂でもこの「主体的に取り組む態度」は「学習意欲」として改訂の基本的な考え方の一つとして重視されており、学習に対する意欲を向上させることは学校の教育活動の中でも重点が置かれている。しかしながら、高学年児童の実態からは「すぐに諦める」「やる気がおきない」「学びに対して面白さを感じられない」という様子が見受けられ、その傾向は学年が上がるごとに強くなっているように感じられる。だからこそ、自分の力でここまで出来た、自分で出来そうだという自己効力感が得られるような、学ぶ意欲につながるようなはたらきかけが必要であると筆者は痛切に感じている。

自己効力感に焦点を当てた先行研究として

は、中学生を対象とした理科の授業において、普段の授業で生徒の自己評価を通して自己強化を行い、達成感を得させて、自己効力感を育てることを目標とした研究(濱保・岡, 2013)があり、この研究の中では普段の授業の中で無理なく実践できる自己評価方を開発する試みがなされている。普段の授業の中で無理なくできること、自身の能力や努力を生徒に認識させるという点は特に筆者も同意する点であるが、本研究では小学生を対象とするので、教科を問わず学級担任として児童と関わられる学校生活全般において日々のはたらきかけを行う。また「自分の力でここまで出来た」ということが実感として得られるように、児童自身の「学びのプロセス」を意識化させることに重きを置く。図1に本論文の全体像を示した。

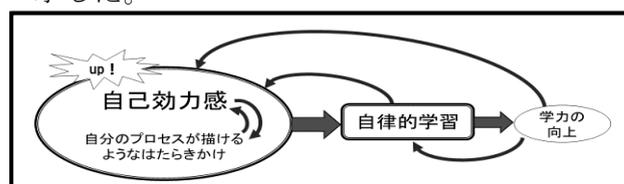


図1 研究の全体像

ところで、鈴木(2012)は学ぶ意欲を捉える一つの切り口として自己効力があると述べている。また市川(2004)は、学力という中でも「学んだ力としての学力」と「学ぶ力としての学力」があり、後者はどれも測りにくいものだとして述べている。「学ぶ力としての学力」には「学習意欲」「学習計画力」「学習方法」「(教わる、教え合う、学び合うときの)コミュニケーション力」が挙げられているが、本論文では筆者も学習意欲を学力の一つとして捉えて研究を進めた。

2, 方法

- (1)対象校：山梨県内 A 小学校。全校児童 300 人程度の中規模校
- (2)期間：2015 年 4 月～12 月
- (3)対象児童：第 5 学年 27 名
- (4)手続き：学級担任として児童に関わりながら、日々の観察を行った。

3, 結果と考察

(1)自己効力感を得るための具体的なはたらきかけ

昨年度の研究から「共通のキーワードを使うこと」「書くことでの振り返り」「顕在化・共有化」が手立てとして有効であったので、今年度もこの三つの手立てを取り入れた。これら三つの手立てを大きな柱とするが、語彙が豊かな高学年が対象児童であるので、キーワードに関しては児童自身が作り出したものも取り入れた。また、他のはたらきかけに関しても児童の成長・変化に合わせて微調整していくことを視野に入れ、はたらきかけを行ってきた。

①学年初めのはたらきかけとその成果：キーワード「プロセス」の共有

4 月当初、児童から、学ぶことに何の意味があるのか、学ぶことに楽しさを見いだせない、面倒くさいといったつぶやきが聞かれた。そこで、児童が学びに対してどのようなイメージを持っているのかを知るために、児童一人一人に学ぶことや学びの楽しさなどについて尋ねてみた。その結果「〇〇ができたとき」「テストで 100 点取ったとき」「〇〇以内に入ったとき」など、成果のみに注目してしまいがちであるということがわかった。このような実態から、結果に至るまでの過程を大切に意識化させる必要性を感じた。それは、昨年度の研究から過程を意識化させることが自己

効力感の向上に有効だったからである。そこで学級全体で共有できる「プロセス」というキーワードを用いてはたらきかけを行っていくことにし、「プロセス」を共有するために学級活動の時間を使い「学び」とはどういうことかを考える時間を設定した。算数の体積の問題を取り上げて、解き始めた時を「スタート」、答え合わせをして正解がわかったときのことを「フィニッシュ」として自分の学びの振り返りをプリントに記入した(図 2)。

ここでの記入で大切にすることは、「ここまで自分で出来た」というポイントを考えることと、学んでいる時の自分の「気持ち」を記入することの 2 点であった。自分の力で出来たことを感じ取ることは自己効力感に、気持ちは学習意欲につながると考えたからである。時間を取りゆっくりと振り返りができるようにはたらきかけたこともあり、同じ正解でもその過程は様々であることが児童自身に認識できたようだった。また、「プロセスを大切にすることで、『ここまでは出来た』『もう少し出来そう』といった気持ちがあきらめないで頑張ろうという気持ちにつながり、学びに面白さが生まれてくる。『クラス』のみんなでのクラスの学びを作っていこう」という筆者

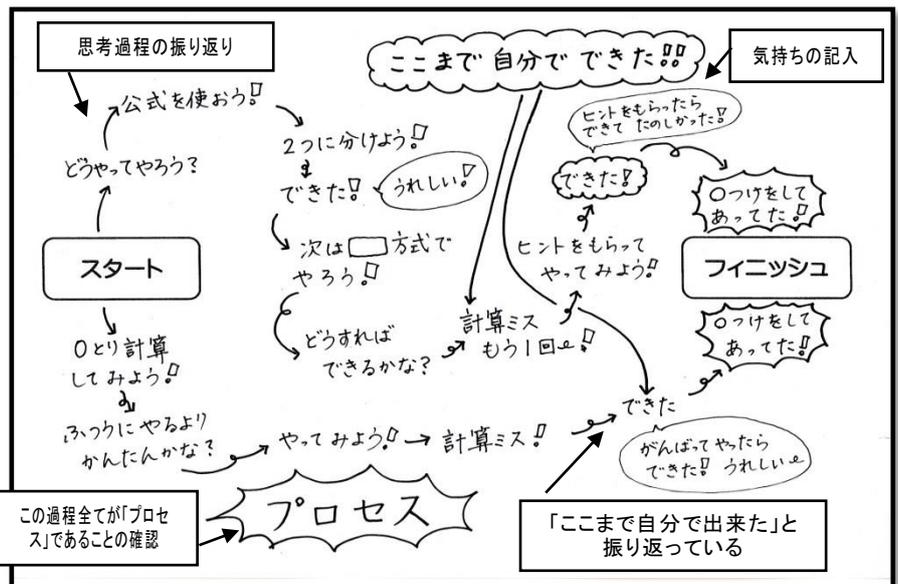


図 2 プロセス図 (印刷時に読めるよう児童の記述を筆者が写したもの)

の思いも伝えた。

このとき記入したものを「プロセス図」と呼んでいるが、この時間以降、自主学習ノートや学習感想に「プロセス図」を記入して自分の学びを振り返る児童が出てきた。「私の頭の中がわかってよかったです。」「プロセス図を書いていると気持ちが嬉しいしすごく楽しいのでやりました。」「プロセス図を書くとき本当の自分が現れて楽しいです。」という感想を書いていた児童もあり、過程を意識化させる手立てとして有効であった。ここでのプロセス図の記入を通し、結果に到達するまでの学びの過程には、児童それぞれに違った思考や感情が存在しているという多様性を筆者が改めて知ることができ、一人一人の見取りの大切さを意識できたことも大きかった。また、ここでは算数の問題を解くということのみの振り返りであったが、この時間に学級全体で「学び」「プロセス」というキーワードを共有できたことが、その後の日々のはたらきかけに生きてきて「学び」の広がりにつながっていったと考えられる(図3)。



図3 キーワードの掲示

②プロセスクッキーとその成果:書くことでの振り返り 顕在化・共有化

二つ目のはたらきかけは「プロセスクッキー」である。これは、週に1度金曜日に一週間の自分の学びを振り返って、がんばったと思ったことをクッキー型の小さな紙に記入して教室に掲示をしていくというはたらきかけである(図4)。



図4 プロセスクッキー

自分を振り返る機会を多く取り入れること、学級内での顕在化・共有化をねらいとした。初めのうちはまだ学びのプロセスという考え方が浸透しておらず、テストの点数に関する記述が目立っていた。しかし、児童の目に触れ共有できるように掲示をしたことで、友達の学びに対する捉え方を知ることでもでき、徐々に記入内容に広がりが見られるようになってきた。また「今週何かテストをしたっけ?」とテストを足がかりとして自分の頑張ったことの振り返りをするのができた。記入内容の大まかな変化は表のとおりである(表1)。

表1 プロセスクッキーの記述内容と変化

月	記述内容	「嬉しい」「得意」を端的に記述し、自分の学び(気づき)を注目した記述。→友達と関わり、意欲に関わる記述。→直接学習とは関係ないと思われるが本人が学びを広げたいと思われる記述
5	<ul style="list-style-type: none"> ●家庭科の本返し縫いができてスッキリ ●漢字のミニテスト 100点とって嬉しい ●逆上がりできなかったのにできたからラッキーな気持ちになった ●難しい問題ができてスッキリ 	
6	<ul style="list-style-type: none"> ●算数でミスしたところをもう一回したら出来てスッキリうれしい ●社会のポスター作りを頑張って達成感があった ●テストで90点以上が多かった ●サッカーの採め事が解決してスッキリ ●算数でむずかしい問題があったけど筆算や間違えたところを見直したら結構出来た ●国語で要旨を書くのが難しかったけど頑張ってやったよ～。でっ! 	
7	<ul style="list-style-type: none"> ●自学の目当てがちゃんと守れたよ～やった! ●50問テストは100点じゃなかったけど、再テストで100点取れて嬉しかった!!! ●テストで目標点になっていたから嬉しかった ●今日いろいろなことを振り返っているいろいろなことを終わらせて2学期まで頑張りたいです 	
9	<ul style="list-style-type: none"> ●総合のプリントが最初なかなか進まなかったけど後から進みました。 ●運動会の練習と組立を死ぬほど頑張ったと思う ●今週は毎日自学を頑張った ●最小公倍数とか最大公約数とかがわからなかったけどちょっとわかってきてスッキリ ●ムダ競争速く走れるようにみんなで工夫した 	
10	<ul style="list-style-type: none"> ●稲刈りをやって農家の人の大変さがわかった ●家庭科のミシンが上手に出来ました ●校外学習で一番頑張ったのは挨拶だと思う。すれ違う人々と挨拶できたと思う ●自学や漢字練習が毎日出来ているのが嘘みたい ●音楽集会の歌や合奏の練習を頑張った ●算数テスト単位の書き忘れがぐやしい 	
11	<ul style="list-style-type: none"> ●国語の「グラフや表を用いて書こう」でみんなの意見や理由にびっくり ●自分の考えを付箋に書いて貼ることを頑張りました ●今日の漢テス自信有り!楽しみだなあ～ ●選挙運動で練習以上に上手く出来たよ～やった ●今週、トイレ掃除を頑張った ●自学がとて楽しかった ●国語の班でまとめる力がついたかも 	
12	<ul style="list-style-type: none"> ●漢字の50問テスト100点じゃなかったから、自学を頑張ります ●時間がかかったけど、図工を頑張った ●漢字テストが1学期より上がって嬉しかった 	

プロセスクッキーは週に一度の記入であるが、この記入を通して、「今週も自分はこんな

ことをがんばったんだ」と、自分の成長を感じ取ることができ、これを継続的に行ってきた積み重ねが自己効力感の向上に結びついたと思われる。クッキーの記述は紙が小さくすぐに書けること、週に一度であったことも負担なく継続できた要因であると考えている。

このはたらきかけにより児童がプロセスを意識できるようになってきたが、それに加え、普段の生活の中では見過ごしてしまいそうな一人一人のがんばりを筆者が見取れ、そのがんばりに対して児童へ声をかけることができるという変化も生まれた。

③学習感想・マイコメントとその成果：書くことでの振り返り 顕在化・共有化

三つ目のはたらきかけは「書く」ことを中心となった「学習感想」と「マイコメント」である。このはたらきかけが②④のはたらきかけと大きく違うところは、筆者がコメントを記入して児童に返すことで児童と教師とのやりとりが生まれていることである。児童の記述に対し筆者がプロセスに関わるコメントを返すことにより、児童が自身では気づかなかったプロセスへの気づきを促せる。このように学びのプロセスの意識化をさらに促進させることを目的としてはたらきかけを行った。

ア.学習感想：算数ノートと自主学習ノート

算数では毎時間、学習感想の記入をした。この記入に当たってはプロセスに関する事などは特に話をせず、教科書の学習感想の記入例を参考にノートの書き方と合わせて確認した。児童が1時間の学びの中で、自分のわからないところを認識したり、友達の意見の良さを感じたり、楽しさや面白さを感じたりしていることを、学習感想を書くことで顕在化させることができる。これにより児童は、自分の学びのプロセスを意識化することができ、それが自主学習につながったり、自分の成長を実感したりしていた(図5)。

自分の力でできたことを実感している記述～算数ノート～

- 一人で①～⑥番まで出来たとてつもなく嬉しいです。これからも頑張りたいです。
- 今日は、算数のいろいろなまとめをしたけど、倍数や約数のところが難しかった。けど、少しは自分でがんばれた。

諦めずに頑張ろうという意欲が見られた記述～算数ノート～

- 今日は最初にやった問題の答えが3/4でまちがって？？って思ってた最後に見直ししたら今度は1/4であってよかったです。

自分の変化や成長を感じている記述～算数ノート～

- 図形を書くのが好きになったので嬉しかったです。算数が嫌いだったけど五年生になったら図形など私の「楽しいなあ」と思う勉強が増えてきました。算数はわかると楽しいんだなあということを改めて実感しました。

学びの意識化が進んだと思われる記述～自主学習ノートの学習感想

- 一度習ったけど一回やってみるとわからないことなどがわかるようになった。次は花粉の働きについて振り返っていきたいです。
- 一回やったところでも2回やるとわからないところがわかるし復習にもなっていていいと思いました。

図5 学習感想の記述

これらの記述から児童の変容を見て取ることができるのだが、これは教師からのコメント(図6)がプロセスの振り返りをさらに深いものにし、この繰り返しのより図5のような記述となって表れたと考えられる。自主学習ノートでも学習感想の記入をしているが、同様に教師がコメントを記入して返している。教師からのコメントはやはり嬉しいものらしく、ノートを返却するとすぐにノートを開いてコメントを読んでいる児童が多く見られ、プロセスを意識化させるとともに励みにもなり次への意欲につながっていったと思われる。

(☆明朝体…児童の学習感想 ゴシック体…教師のコメント)

☆いろいろ考えてよく頑張った
わからん⇒諦める・寝る
⇒でも考える⇒おーわかった！
今日は下のプロセスだったね。

☆6の問題が難しかったです。だんだんわからなくなってきたけど、がんばってできたから嬉しかったです。

すごい！諦めないプロセスだね！
☆わからないところもあったけど分かったところもあって嬉しかったです
それは「ここまでポイント」がわかっているってことだね。これもプロセス！
☆三角形の面積の公式や計算をやって、すーごく楽しかった！！
すごい～、図形がちょっと好きになっている自分に気づいている？
間違いもきちんとプロセスとして捉えて頑張っているよー
☆わかかってきて面白かった
うん！すごくちゃんと考えていたからしっかり(知識の)引き出しにしまっているのが分かるよ
☆今回は多分だめだめだと思う。
そうなんだ…でも「だめだめ」ってことが自分で「わかる」ってこともいい勉強なんだよ。そこから「こうしよう」と思える人実行する人が伸びていく！
☆分数を小数に治すとき割り算で割られる数とわる数が反対になってしまうので直したいです。
既に自分のミスに気づけているね。いいプロセスです。がんばって！

図6 プロセスの意識化をねらった教師のコメント

イ.マイコメント

マイコメントは、自主学習ノートに記入した児童のコメントのことである。これは感想ではなく、どんな学習をするのか、どうしてその学習をしようと思ったのかを記入したもののことである(図7)。

- 4年生の頃この単元が苦手だったので復習してみました
- 忘れかけていた漢字と苦手な漢字
- 最近の50問テストで間違えたところの漢字練習
- 送り仮名のある漢字練習
- 算数と国語の2学期やった中で苦手なところ
- 自分で考えてタメになることをしました

図7 マイコメントの記述

マイコメントに関しても筆者がコメントを記入しておりやりとりが生まれているが、ここでは学習計画・学習方法を意識化させることに重きを置いてはたらきかけを行った。

この記入を促してきたことで、やらされている、これでいいやという感覚から自分で決めてやっているという自律的な面が育ってきたと思われる。学習計画力・学習方法などは、本研究で焦点を当てる「学ぶ力としての学力(市川, 2004)」と捉えられるものであり、くり返し声をかけ記入できるようにはたらきかけを行ってきた。また様々なはたらきかけの中で振り返りを大切にしてきたこともあり、自分の苦手なところをよく捉えられるようになったことが、学習計画力につながってきたと考えられる。筆者も、児童の取り組みから効果的だと思われる学習方法などを「このようなやり方があるよ」「〇〇さんがこんな事を書いてきたよ」と紹介していくことを心がけ、学習方法を学級全体で共有できるようにした。すると友達の良いところを取り入れて自分なりに学習をしていこうという姿勢が見られるようになってきた。自主学習に関しては学校全体で取り組んでおり、5年生は家庭学習60分間をゆめあてとしているが、その60分間をどのように構成するかを考える「自主学マネジメント」の発想も生まれ、ノートに自分の自主学習そのものを振り返る記述も見られるようになってきた。

学習感想にしてもマイコメントにしても、書くことにより児童は自分の考えを意識化でき、また筆者は児童一人一人の考えや意欲を見取ることができる。そしてそこからコミュニケーションが生まれてさらなるはたらきかけができる。このようなやりとりをしてきたことで学習内容に関する質問も増えてきた。質問には、丁寧に返事を書いたり個別に指導をしたり、学級全体に返して一緒に確認したりしているが、下記のような記述も見られ、日々のやりとりによって自律的学習が促進され、自己効力感が向上してきたと考えられる。

12/18 台形の面積の求め方分かんない(算数ノート)
「そっかー、次の時間に練習問題をやってまたみんなと確認するね。(筆者)」
12/19 算数の台形、家に帰って教科書見たりしたらわかった!
今回の算数自信あるよ先生!ガンバリマス(自主学習ノート)

④プロセスシートとその成果:書くことでの振り返り

四つ目のはたらきかけは「プロセスシート」である。これはテストの返却時に記入するシートである。小学校では各学習単元の最後にテストを行っているが、児童はテストの点数だけを気にして、点数が分かるとそこで気持ちが切れてしまっているように見受けられた。そこで、自分の取り組みの過程も含めて振り返ることができること、また「学ぶ力としての学力(市川, 2004)」の中の「測りにくい力」を顕在化させることを目的としてシートを作成した(図8)。

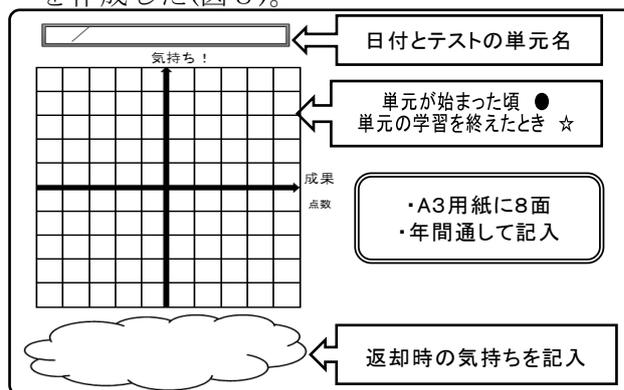


図8 プロセスシート

シート作成に当たっては、書きやすさなど、児童の意見を取り入れながら作成した。児童の気持ちや意欲を書き込めるようにしたいと

考え、吹き出し欄も加えた。

吹き出しには頑張った成果を実感している記述や、次への頑張りを意識している記述が見られた。自分の苦手なところがわかった、とにかく嬉しい、小さなミスが悔しいといった素直な気持ちが表れているものもあった。努力したのに結果として表れなかった時には「残念…」といった記述になっているが、シートを継続して記入していることで、頑張ったときのことを思い起こすことができ、次へのやる気につながることで、自分の学びに対する姿勢の変化や成長を長い目で繰り返し振り返ることができ、そのことが学習意欲や自己効力感の向上につながったと考えられる。継続して行うことができた要因として考えられるのは、どのような教科のテストでも活用でき、児童が短時間で記入できるので学期末のテストの多い時期にも負担にならずに記入できた点が挙げられる。以下では、継続して行う中で見えてきた児童の変化と教師の変化について述べる。

このシート記入を始めてから、テストの返却を楽しみにする様子が学級全体に広がってきた。また、シート記入を通して学びの振り返りをしたことで、テストは自分のがんばりの表れであると感じテスト直しを丁寧にするようになった。そしてまた、自主学習に生かすこともできるようになり、自律的学習が進められるようになった。このような変化が見られた頃から、テストには自分の目標点を記入するようにした。記入にあたっては、予想点ではなく、単元の学習への取り組みを振り返りながら自分で設定する目標点であることを全体確認した。この記入を始めてから、100点でなくても自分の納得する点数が取れたことに満足をする記述や、自分の中では苦手なところだったので70点でもいいほうだと思おう、といった振り返りがシートやプロセスクッキーからも見て取ることができるようにな

ってきた。児童の一人は「テストをする前目標点100点。やったあと96点」と自分の頑張りと手応えをテストに記入しており、自分の学びを意識化できている様子が見取れた。

頑張ったのに点数になって現れない時にもどうして間違えたのか、何を間違えたのかということを冷静に考える姿勢が生まれてきたので、筆者はテスト返却の際、どのようなミスが目立ったか、理解していたのか、どんなところが頑張っていたのかといったことを学級全体に丁寧に話してからテストを返却するようにした。また、テストが終わると「いつ返してくれるの？100点の自信あるから楽しみ。」という、頑張ったからこそ結果を楽しみにしているつぶやきが多く聞かれるようになってきたので、筆者もできるだけ翌日にテストの返却をするようにした。児童のテストに対する気持ちが高まっているうちに返却できたことも次へのモチベーションにつながったと考えられる。このシートでの振り返りが児童の変容につながったとみられる自主学習ノートの記述を下記に示す(図9)。

テストを通して振り返りや学習意欲が見られた記述～自主学習ノートから～

- 見直しシートで式を書いて自分の力でやってみたらできた！でもテストでなんでできなかったを考えたら、約分をするのを忘れていたりあせっていたりしたからだと思う。今度は気をつけたい。
- 今日理科のテストをやって結構いい感じで手応えがあって、今もこういことをノートに書く事でよくわかります。
- テストは100点がとれたら嬉しいけど、取れなくてもがんばったらイイナと思います。
- 今日算数のテストが返されました。目標点は95点だったけど85点でした。85点だった理由は問題の読み間違いです。すごく惜しかったのですごく悔しいです。次からは問題をちゃんと読んで表100点、裏50点を目指したいです。算数ではない次のテストでも悔しくないような納得できる点を取りたいです。

図9 自主学習ノートの記述から

記述からは、学びに対する面白さ、学習意欲の高まりが感じられ、このシート記入を継続して行うことが学力の向上につながる一つの要素になりうると考えられた。

(2)複合的に起こってきた変化

「(1)自己効力感を得るための具体的なはたらきかけ」により複合的に起こってきたと思われる変化を2点に分けて述べたい。

①授業及びその他の学習の様子

上記のはたらきかけと並行して「わからない」を大切にしたいという筆者の考えを伝え続け、友達のいい意見やいいつぶやきを大切にすることを常に心がけて授業を行ってきた。その結果、1学期に聞かれた「めんどい」「もうむり」「わからん」といったつぶやきが減り、2学期になると集中して授業に取り組む様子が見られるようになってきた。また、いいつぶやが多く聞かれるようになり、自分が疑問に思ったことを近くの友達と話して確認し合うような姿が自然と見られるようになってきた。筆者はそれを「おしゃべり」として注意するのではなく、「学び合い」「教え合い」として認め学級全体に広げていった。筆者が感じた児童の変化を児童自身が認めており、学習感想等の記述にも多く表れていた(図10)。

- 9の問題が難しかったけど説明を聞いたらよくわかりました。○○さんの意見が教科書にない新しい意見ですごかったです。
- さんに教えてもらったりしてよくわかりました。自分でも頑張りたいです。
- 今日問題がわからなくて悔しかったけど、友達や先生のヒントのおかげでわかってとても気持ち良かったし、また頑張りたいです。

図10 算数ノートの学習感想から

また、勤務校ではコミュニケーション力に重点を置いた研究を進めていたのでグループ学習も多く取り入れたが、お互いの意見を認め合いながら自分の意見も主張できるようになるといったことが授業中の様々な場面でも生きてきた。例えば、わからない児童には自然と教えてあげるといった人間関係の横のつながりが見られるようになっていた。この人間関係の変化は「5班のみんなといいアイデアを出し合ったら出来てとっても嬉しくて、そのあとの勉強もとっても出来ました。」「友達が、私のアイデアで問題が解けたと言ってくれて嬉しかったよ。」のような記述となっ

て現れ「友達に認められて嬉しい」「みんなでがんばっていこう」という雰囲気生まれ、それが自律的学習へとつながっていったと考えられる。

②学級の変化

ここまで述べてきたはたらきかけが、学級全体の変化にもつながってきていた。やはり学びは学習内だけにとどまらない。運動会の取り組みや学級会の場面などお互いの考えを認め合い、折り合いをつける、自分たちで決めて自分から行動する、友達との関わりを大切にするといった様子が見られるようになった。1学期には、トラブルがおこるとすぐに教師のところに相談に来る雰囲気があったが、自分たちで解決できるようになってきた。小さなことにはこだわらずに今大切なことは何かそのためにはどうすればいいかといった視点も持てるようになってきた。自分たちで解決できるようになってきたことで各々の自己効力感が向上し、そのことが学級の風土にも変化をもたらしたと思われる。『「ダメだったから自学で復習しよう」と思ったけど最後のまとめでよくわかった。それと5年生になって答えや考えを隠さなくなった!!(4年生までは恥ずかしかったので隠していた)』といった記述からも、学級内に安心して生活できる雰囲気が生まれたことが分かり、そのことがまた自律的学習を向上させたと考えられる。

4. 全体の考察

本研究を通じて、筆者自身が教師として変化してきたことがいくつかある。「具体的な学習方法を紹介していくようになったこと」「マイナスな言葉かけをプラスに変えるようになったこと」「普段の言葉かけを意識して大切に行うようになったこと」「気づきを促す言葉かけ・児童がしたことやしたことに対して言語化・意味付けをするようになったこと」の4点である。鈴木(2012)は、言語的支援は児童

や生徒の自己効力を効果的に強化しこれが意欲を引き出す上で重要なポイントであると述べているが、日々当たり前のように行っている言語的な支援を教師自身が意識できたことは大きかったと思われる。また、このような教師の変化が生まれた要因として、プロセスを意識化させるはたらきかけを通し、児童の思考過程や思いを見取る場面が多くあったということが大きい。様々な個性の児童が集まる学級では、一つの方法だけではすべての児童の思いを汲み取ることはできないかもしれない。しかしながら、ほぼ毎日行う学習感想・マイコメントの記入、週に一度のプロセスクッキーの記入、学習單元ごとのプロセスシートの記入と、はたらきかけのバリエーションを多くしたことで、それぞれの児童がこれらのはたらきかけのどこかで自分の考えや思いを表出できていたと考えられる。

また、テストやプリント課題などで未記入が減ってきたという点からも、諦めずに自分ができるところは頑張ろうという姿勢が見てとれた。このような児童の変化を感じ取ってくださった保護者から「書く事が苦手でなくなってきたようです。」という声をいただいた。筆者が感じ取った児童の自信や変化・成長が家庭に伝わっているということが分かり、学校・家庭の両輪で児童の成長を支えていくという点において、本研究の効果が期待できると感じた。

本研究を通して見とることができた児童の変化は、子ども自身の成長・発達によるところも大きいと思われるが、日々のはたらきかけによって学習面だけでなく生活面にまで変化が見て取れた児童もいる。A児は言葉で気持ちを伝えることを苦手としている面があったが、本研究のいくつかのはたらきかけを通して、「おれ割り算難しいのによくわかった。またやりたい。割り算よくわからないのにクリアできてうれしかった。」のように自分のプロセスや気持ちを言語化し、表出できるよう

になった。自身の学びの振り返りが学習意欲を向上させ、また友達からもA児の変化や成長を認める声が聞かれるようになったこともあって、学校生活全般に意欲的に取り組むようになった。自分が認められていることを実感し自己効力感を向上させ、言語でのコミュニケーションの向上にまでつながったと考えられる。

日々のはたらきかけを積み重ねていくためには、教師も児童も無理なくできる手立てを考え、緩やかな変化に対応しながら、うまくいかないかもしれないと思うことであっても、諦めずにはたらきかけを続けていくことが必要である。本研究では対象児童が高学年児童であったので、筆者も一緒に頑張っているということを伝え、教師の気持ちも理解してもらいながらはたらきかけを行ってきた。この「教師も児童と一緒に学び頑張っている」という姿勢が、本研究には欠かせなかったと思われる。教師からの一方通行でなく、教師と児童、児童と児童のつながりを深めていくことの大切さに、筆者は改めて気づかされた。

多忙化の中で教師が毎日コメントを書くなど大変な側面もあるが、「お互いの忙しさや苦勞、頑張りを理解し合いながら一緒に学んでいく」というスタンスを持ち、児童とのつながりを深めていくことが、はたらきかけを継続させる鍵となる。今後は学年間で意思の疎通を図りながら学年全体にもはたらきかけを広げていきたいと考えている。

5. 引用文献

- 濱保和治/岡田大爾. 2013. 自己強化を高め、自己効力感を向上させる自己評価法の開発. 広島国際大学院大学研究報告. 46. 1-17
- 市川伸一. 2004. 学ぶ意欲とスキルを育てる いま求められる学力向上策. 小学館
- 小林恵子. 2014. 活用の意識化を進めるはたらきかけ. 山梨大学大学院教育学研究科教育実践創成専攻「平成26年度教育実践報告書」. 121-128
- 鈴木誠. 2012. 一ボクにもできる一がやる気を引き出す. 東洋館出版社
- 寺崎千秋. 2008. 小学校新学習指導要領の展開総則編. 明治図書